

●特集●

新しい生活様式を取り入れた保育

新型コロナウイルスの感染拡大は、様々な面で社会に大きく影響を与えております。このような状況下でも、保育という営みは続けていかなければならない仕事として、様々なメディアでも報じられ、また、各地域での研究会や学会等でも報告されているかと思えます。さて、本号では「新しい生活様式を取り入れた保育」として、各園の取り組みや工夫を共有したいと思います。

新型コロナウイルスから学んだこと

田澤 里喜

本年度、新型コロナウイルスに翻弄され続けました。もう名前も見たくないくらい新型コロナウイルスが嫌いになりました。そんなウイルスと「ウィズコロナ」といわれることも嫌だし、生活様式を嫌いな相手のために新しくしたくないとまで思ってしまう。

もちろん、これらの意味はそういうことではないことはわかっているつもりですが、気持ちとしては未だ整理がつかません。

緊急事態宣言中はその思いはもっと強く、休園中に何か新しいことを、今だからできることをしなくてはと思うものの意欲は減退し、何も思い浮かばず、浮かんだとしても実践までに至らないことも多かった。

この時期、各園の様々な取組がメディアやSNSでも取り上げられていましたが、それを見るたび、自分の至らなさを痛感するばかりでした。

しかし、あらためて振り返ると新型コロナウイルスから学んだことがいくつかありました。

一つは、衛生管理はやはり大事だということです。これはまず一番に思い浮かんだことです。新型コロナウイルスを契機に改めて園の保健衛生管理を見直す部分は多かった。

次に子どもが遊びを共有することの大切さを再確認したことです。当園では子どもたちが自由感を持って遊ぶ「あそびのじかん」とその遊びを共有し、充実させる時間「みんなのじかん」の連携を大切にしています。

しかし、新型コロナウイルス感染症対策として3密になりやすい「みんなのじかん」を1学期は必要最低限にしていました。すると、他児の遊びに対する興味、遊びと遊びのつながり、他者への理解や応援という場面が少なくなったように感じました。

子どもの興味関心が豊かになるような環境構成が

必要であることは言うまでもないですが、遊びを共有したり、自分の思いを伝えたり、一緒に考えたりする時間も遊びや関係を深まる大切な環境であることを新型コロナウイルスに改めて考えさせられた形になりました。

保護者に対しても学んだことがあります。9月下旬にオンラインの保護者会を開催しました。ネット環境は家庭により様々ですから任意参加で、「とりあえず試しにやってみよう」という意識で実施しました。

その内容は、その時期の子どもたちの様子を写真で見てもらい、私が解説する形式でした。参加者は60名程度（全園児約260名）でしたが、その後、限定で動画配信したところ、予想以上に多くの保護者が見てくれました。

また何人かの子どもからは「写真ありがとう、ママと一緒に見たよ」と言われました。親子で園での出来事を話している様子が目に浮かぶようでした。

これは保護者との新しい連携の可能性が見えた瞬間でもありました。幼稚園は人と人との関わりの中にありますから、直接対話をすることの大切さはいつであっても変わりませんが、オンライン利用が選択肢の一つに加わることは新しい生活様式の中の保育の可能性の一つになるのかもしれない。

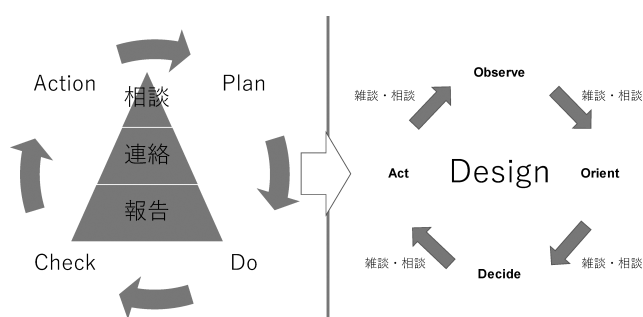
●Profile

田澤 里喜（たざわ さとぎ）
学校法人田澤学園 東一の江幼稚園 園長
玉川大学 教育学部 准教授
1996年玉川大学卒業後、玉川学園幼稚園に担任として4年間勤務後、東一の江幼稚園に異動。また同年大学院に進学、在学中より短大、専門学校の非常勤講師を経て、2005年より玉川大学教育学部に勤務、また2015年より東一の江幼稚園々長に就任。
研究テーマは保育実践と園長の役割。

当たり前を見直すと新たな保育の可能性を感じる

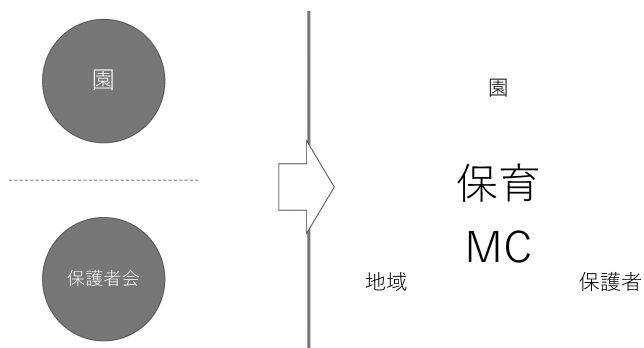
堀 昌浩

2020年新型コロナウイルスが新たな生活様式をもたらした。以前のような保育が出来ない、と考えるのではなく、VUCA社会、Society5.0を感じる保育・園組織の在り方・地域、保護者との連携などを見直し／改善することにより曖昧・不確実な社会・新たな社会といわれていたものが少し見えてくるのではないかと、思い実践をしています。まず、9年ほど前より一斉型の保育から子ども達主体の保育への転換を図っていますが、保育の転換を行えば行うほど、旧態依然の園の在り方が障壁となりなかなか転換が進まない。その障壁となっているのが「当たり前」という先入観だと思います。子ども達主体といいながら、園長・主任からのトップダウン組織、この当たり前を解決するために「ホウレンソウ（報告・連絡・相談）」を見直しました。全体での職員会議等は年に数回と減らし、その分園内の至る所（時間・場所を指定しない）で保育者が雑談出来る雰囲気をつくること、その雑談が相談「ザッソウ（雑談と相談）」として上がってくるボトムアップ型の組織へと変換しました。さらに、Plan（計画）→Do（実行）→Check（確認）→Action（改善）のPDCAサイクルを見直し、Observe（情報収集）→Orient（状況判断）→Decide（意思決定）→Act（行動）さらに、園の保育の方向性を示すためにDesign（方向性）を加えてDOODAサイクルとしました。これは保育者の主体性を確保する事を目的として「共主体」の保育へ転換を図っています。



どのような園内組織を構築すると保育の質が向上するのかを模索し、行っていた取り組みです。さらに、このコロナ禍をどのようにプラスに保育の質の向上に変換していくのかを考えたときに、保護者組織の見直し・行事の見直しが必要ではないかと考えました。まずは、保護者組織の見直しであると考えました。園の運営をするにあたり保護者の協力がなければならない、という当たり前を見直すことです。これは、保護者の協力を得ないで運営をするということではありません。むしろ、より深いところまで

関与出来る体制をつくると、より保育も理解する事が出来るのでは？との考えからです。そこで、保護者会という単独組織を一度リセットすることにしました。新たな保護者会は会長などの役職を持たない合議体で、園の組織の一部として位置づけ、さらには地域の方々や識者に関与してもらう形の地域コミュニティを創ることにしました。当園では保育 Management councilと称して新たな保育環境と行事のかかわりを話し合う場としました。そこでの問いかけは、運動会を例にとってみると、運動会は子どものための行事なのか？ 親向けの行事なのか？ 運動会のお遊戯などは、本当に子どもたちが主体的に考えて実践することを重視した保育と言えるのでしょうか？ むしろ、「決められたことには、黙って従いなさい」という保育となっていないか？という「隠れカリキュラム」のひとつなのでは？などを理解し解決していくものです。これらから、以前のような運動会を実施せず、子ども達が考えた運動プログラムを親子で楽しむ年齢ごとの保育参観として新しい形となりました。



コロナ禍の先を見すえて、園・保育者・保護者・地域が新たな関わりを持つと子ども達の環境が豊かになるのか？を模索しつつ今後も保育をとおして社会貢献出来るように心がけていきたいと思っています。今回はこの様な貴重な機会を頂きまして感謝いたします。

●Profile

堀 昌浩（ほり まさひろ）

認定こども園さくら（栃木県栃木市）

22世紀を見据えた「自分で考え」「判断し」「行動できる」子ども主体の保育を行うため、保育者の主体性を確保し、成長し続ける地域の中の園を取り巻く環境を考えて活動しています。

新しい生活様式の中で、私たちが目指す保育とは

天笠 昌明

当園は、福島県の会津若松市から10km離れた会津美里町の社会福祉法人の幼保連携型認定こども園です。

4月21日に全国で出された緊急事態宣言を受けて、当町でも22日から5月31日まで登園自粛要請がなされました。当初、福島県の感染者は少ない状況でしたが、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の総則「疾病等への対応」「災害への備え」にも記載されているように関係機関や保護者との連携を早急に図りました。

2011年の東日本大震災及びその後の原発事故の経験及び災害からの復興を経て町の対応も早くなっており、今回もすぐに公立認定こども園と共に招集され、関係機関と協議させて頂きました。

自園においても、登園自粛の中で出来る事を職員間で話し合いました。より正確な情報の提供、新しい生活様式の徹底を出来る限り実践しました。また、自粛で休園している子どもたちや保護者の心の安定を図るために、電話やメールで連絡もとりました。

自粛解除後は、子どもたちの心の安定が一番だと考え、なるべく今まで通りの保育・園生活をしていこうと話し合いました。外遊び、コーナーでの遊び、給食等、密にならないよう環境設定に気を配りながらも、通常通りの保育を行ってきました。人が集まる様な行事についても見直す中で、今まで普通に行ってきた行事が、「本当に必要なか?」「誰が主役なのか?」「必要な行事を安全に行うには、どうしたらいいのか?」職員間で考える機会になりました。万が一、園内で感染が広まった時にどこまで対応できるかは分かりませんが、まずは子どもたちの日常を取り戻すために全職員力を合わせて頑張っていきたいと思っています。

4月4日に、岩手県立大学井上孝之准教授に指導して頂き職員の資質向上のための園内研修を行いました。同じ系列園がもう一園あり、職員の入替えもあるという事からスタート前に園内研修の必要性を感じて依頼しました。コロナ禍という事もあり、2園同時にZOOMでの研修を初めて頂きました。共に3つのグループに分かれて、「保育の質を考える」という題で話し合ったのですが、画面越しに井上先生の助言を受けながら、色々な意見が出され、他の職員の考え方も理解し、職員間の距離も縮まりました。現在、思うような研修が受けられない現状を考えると、年度開始時に研修をすることは大事だと思いますし、コロナ禍においても保育がブレないのもそのおかげだと思います。そして、このような形の研修ならば、今後も行っていけるのではという手ごたえも感じました。

7月に園の保護者に行った新型コロナウイルスに関するアンケートに興味深い結果が出ました。(142世帯中121世帯回答)園行事について、①開催8名②縮小して開催49名③開催しなくてもよい64名。開催しなくても良いという保護者が意外と多く、「今後のコロナの発生状況に応じた対応を適切に行って頂ければそれでいいと思います。」「色々な行事が無くなり

ましたが先生方が工夫して下さり、日常の園の生活を楽しんでいるようです。行事が無かったけれど別な楽しみが沢山あって楽しかったね～と言えるような日々であればいいなと思っています。」という意見がありました。

これからの新しい生活様式の中の保育であっても、職員の研修や保育をしっかりと見直し、工夫していく事が大事なのではないかと思います。そのためには、子ども主体の保育であるという事と職員の意思疎通がとれているという事が重要になってくると思います。

●Profile

天笠 昌明（あまがさ まさあき）
社会福祉法人高田幼児 幼保連携型認定こども園ひかり 理事長兼園長
研究テーマは、子ども主体の保育、保育の質の向上
働きやすい職場環境作り。

必要不急の“遊び”を止めるな！

新城 宗史

2020年3月、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルスの感染者が増え続ける中で、感染拡大のリスクに備え全国の小中学校と高校、特別支援学校が一斉に臨時休校となった。また、学校の臨時休校に伴い児童館や子育て支援センターも臨時休館となり、子どもたちにとっても、また子育てをしている保護者にとっても「居場所」を失う事態となった。

さて、私は沖縄県宮古島市立児童館の運営委託を受託し「平良（ひらら）」という地域で児童館運営を行っているが、前述したような状況が利用者（子どもと保護者）にどのような影響を及ぼしたのか、またそのような状況の中で地域の子育てや子育てを支える拠点としてどのような支援のあり方を模索してきたのかを振り返ってみたい。

市内全児童館臨時休館。行政からのその指示は突然に発出された。当時の新型コロナ感染蔓延の状況から、臨時休館となった場合に対する少々の心構えは持っていたものの、その日「先生、もう一緒に遊べないの?」と寂しそうに帰って行った子どもたちの表情を今も鮮明に覚えている。

第一波に伴う臨時休館は3月上旬から約2週間、4月上旬から5月中旬までの約6週間という長期間におよんだ。臨時休館後すぐに起こった問題は「食べる」ということだった。学校も臨時休校となっていたこの期間、臨時休館後4日目にしばらく食事をしていないという兄弟が児童館を訪ねてきた。この問題に関しては、夏休み等の学校長期休業の際にも度々あったのだが、先の見えないコロナ禍にあって、子どもがどれだけ不安を抱き、どれだけ覚悟をもって「児

童館へ行こう」という選択をしてくれたのだろうかと思うと、とてもいじらしかった。

次に見えてきた問題は「子育て」ということだった。「すみません。少しでもいいので、話をしに行ってもいいですか?」と電話をかけてきた母親の声は、まるで「助けて」と言っているようだった。聞けば母親は専業主婦で日中2歳児の娘と二人で過ごしているそうだが、子どもが家中のものを何でも投げたり大声を出したりして過ごしているとのことであった。そのような姿にどう関わればよいのかかわからず、悩みに悩んで児童館へ電話をしてくれたそうだ。コロナ禍にかかわらず、初めての子育てに加え近くに頼れるキーパーソンがいない核家族の子育て家庭にとって、同じ子育ての不安や悩みを吐き出せていた子育て支援施設の必要性を改めて実感した。

そんな子どもの姿からも感じたのは「遊び」という問題である。児童館という施設の最大の良さは、子ども自らの意思で来館し、友だちとの間に心をかよわせながら互いのイメージを実現できることが保障され、条件によって措置される場所ではない「居場所＝拠り所」であると考えている。そのような居場所「遊ぶ」ことを失った子どもたちにとって、臨時休館という期間がどれだけ辛い時間だったろうかと思えば、やりきれない気持ちにもなる。

施設が再開されることとなった日、児童館の玄関前には心待ちにしていた子どもたちが開館前から列をつくった。「先生、抱っこして」と手を握ってきたその柔らかさが愛おしくて仕方なかった。

私の恩師が「児童福祉とは、子どもの普段の暮らしの幸せを実現することだ。」と話していたのを思い出す。新型コロナウイルスが猛威を振るう中、保育所や放課後児童クラブなど「必要な施設」は運営を続けた。しかし、児童館や子育て支援センターといった子育てや子育てを支える施設もまた「必要な施設」であり、新型コロナウイルスの脅威から命を守ることと併せて心身の健全育成支援も守るということでは「必要不急」と思えてやまない。

●Profile

新城 宗史（しんじょう むねふみ）
一般社団法人沖縄こどもみらい創造支援機構 理事長。
沖縄県内の保育所・幼稚園で働いた後、宮古島市教育委員会、宮古島市福祉部に勤務。平成31年3月に宮古島市役所を退職し、現職。
地域コミュニティ再生の取り組みを日々模索中。

新しい生活様式に学ぶ、新しい保育

柴田 賢一

新型コロナウイルスは社会・生活への多大な影響をもたらした。保育施設においては「子どもの生命の保持」を最大の懸案事項としつつも、多くの学校

が休校や遠隔授業への振替えを行う中、保育所ははじめ児童関連施設がコロナ禍の中でも開園し続けることを使命としていたことは記憶に新しい。さてそのような中、各園での生活はどのように変化したのだろうか。筆者の勤務する大学に近いA保育園・Bこども園での取材をもとに見ていきたい。

まずおそらく全ての園で手洗い・うがい、マスク着用や消毒などが徹底されたであろうが、今回取材した2園に共通することは、感染予防のためにいわゆる「水際作戦」がとられたことである。両園とも全国規模の大企業が多い地域にあり、園児の保護者も少なからず県境をまたいだ異動を行う必要がある。そのため園では保護者の立ち入りを制限し、従来園内で行われていた子どもの受け渡しを園の入口で行うなどの対応がとられた。

そのような状況下で必要になったのは、どのように日々の保育の様子を保護者に発信するか、ということである。A保育園ではセキュリティ対策を講じたうえでSNSにて情報を発信している。またBこども園では、安心メールの発信やHPの頻繁な更新などで情報を発信している。限られた情報ではあるが保護者は園での子どもの様子を楽しみにしており、SNSで発信した内容について、保護者が連絡ノートを用いて反応するなど、対面以外でのコミュニケーションが充実しつつある。また子どもの受け渡しが簡素化されたことで、職員が子どもと向き合う時間が増えるなど、副次的な効果も生まれている。

職員の負担軽減もまた一つの課題である。Bこども園では1号子どもの登園自粛期間中には、普段1、2号子どもの保育に携わる職員がローテーションで2、3号子どもの保育にも入ることで職員の負担軽減を行った。運営判断が必要なケースではあるが、職員間の公平性を確保する点でも意義はある。またA保育園ではアルコール消毒以外にも天日干しによる紫外線消毒も行うことで負担軽減につなげている。

しかしこのような状況の中でも優先すべきは「子どもの最善の利益」である。保育施設では「生命の保持」を最優先しつつも、マスクで顔が覆われて表情が見えない保育を改善し、外出自粛中で溜まっていた子どもたちのストレスを受け止めなければならない。A保育所では、子ども同士での衛生管理（唾をかけない、不必要に顔を触らないなど）を留意の上で、屋外での遊びでは子どもが大声を出すことも受け入れている。長きにわたって近隣住民と築いてきた関係性が、このような状況においても良好に発揮されている。またBこども園でも、広い園庭を活かして子どもが十分に遊べる環境を整え、子どもの遊びを保障することに留意している。もちろん、このような取り組みの根底に、保護者、保育者等の関係者の意識の高まりがあることは言うまでもない。

最後になったが、今回のコロナ禍ではこれまで用いられてこなかったICTを活用するようになったこと

や、衛生管理において新たな知識を手に入れることができたこと等、決してネガティブな影響だけではないことも忘れてはならない。置かれた状況で物事を「肯定的にみる」ことができる視点は、我々が保育から学んだ知恵であるかもしれない。

●Profile

柴田 賢一（しば けんいち）
尚絅大学短期大学部 幼児教育学科 教授
教育原理、教職・保育者論、保育内容総論等を担当。研究テーマは教育・保育関連語彙に関する歴史的研究、保育記録と幼児理解についての研究。特に保育・幼児教育に携わる人々の意識に影響する教育・保育関連語彙の変遷について長期的な歴史的視点からの研究を行っている。

新たな「ディスタンス」を味わう保育学

境 愛一郎

新型コロナウイルス感染症は、我が国で連綿と受け継がれてきた、ある種の信仰にも近い保育の土台に大きな衝撃を与えた。子ども・保育者らによる豊かな対話や共同生活、趣向を凝らした保育環境での直接体験、保護者や地域を巻き込んだ行事といった今日の保育の中心的コンテンツは、そのほとんどが、人々が園などに集い、密接に関わることを前提とされている。昨今では、開かれた園を目指し、園外の施設や専門家との交流も活発化していたことから、コロナ禍によってあらゆるものの間にディスタンスが発生した影響は計り知れない。また、世界有数といわれる「密」な人員配置、人手不足・多忙が叫ばれる労働環境といった構造的要因は、良くも悪くも独自の実践知や専門家像を育ててきたと考えられる。そのような価値観や意識の領域についても、ターニングポイントに差し掛かっているといえるだろう。

類似の変容は、過去に地震や台風によってももらされており、人々は生活の「復興」や「回復」を目標に尽力してきた（放射能による汚染など、その一言では片づけられない問題もあるが）。しかし、そうした災害とコロナ禍の大きな違いとして、以前の状態に戻るのではなく、コミュニケーションや働き方の抜本的な改革、まさに「新しい生活様式」への転換が一部で目指されていることがあげられる。保護者の働き方が変化すれば、保育施設の利用方法も当然変化する。生活に新しい慣習やツールが導入されれば、それを基盤に展開される保育実践も根本から変わらざるを得ない。

このように述べると、非常に危機的なものを感じるが、一方で、生活様式の激変自体は、保育の歴史のなかで何度も繰り返されてきたともいえる。女性の社会進出等が進み保育所と幼稚園の在園児数が逆転したり、情報機器の普及によりICTなるものが

台頭したり、ある現象に新しい名称や定義が与えられたりといったことは枚挙にいとまがない。そのたびに保育の実践と研究の積み重ね、総じて保育学には、イノベーションが生まれてきたといえるのではないか。「新しい生活様式」によって生じた環境との「ディスタンス」は、密な関わりを自明のこととしていた保育学を問い直し、新しい方法論や価値観にいたる好機ともとれるし、とりたいと思う。

最後に、群馬県前橋市にある幼保連携型認定こども園の清心幼稚園の取り組みを少しばかり紹介したい。筆者は、3月の一斉休校措置以降、同園とビデオチャットによる情報交換を続けている。そこでは、様々なご苦労とともに、新しい「ディスタンス」を力強く遊ぶ先生方の取り組みに触れることができた。

まず、園便り刷新である。これまでの園便りは、保育中の出来事を、どちらかといえば母親に向けて発信するものであった。つまり、登園できる子どもが減れば、途端にその魅力は薄れてしまう。そこで、清心幼稚園では、紙面構成を大幅に見直し、地域情報や保育者のプライベートでの体験を紹介するコーナーを設け、登園の有無、老若男女を問わず楽しめる便りが目指されるようになった。また、この園では、地域で活躍するアーティストと積極的に連携し、土日などは保護者も招いたワークショップを開催していた。コロナ禍により、従来型の活動は自粛を余儀なくされたものの、各自が車で園に乗り付け、降りないまま活動に参加したり、持ち帰りのキットを受けとったりする「ドライブスルーワークショップ」が行われた。そこでは、アーティストが完全に遮蔽された場所から手だけを出して子どもと対話しながら絵を描いたり（題して「ドローイングマシン」）、長い棒の先にペンを括り付けてキャンバスとの距離を保ったまま作品を制作したり、保育者がラジオ放送を行ったりと、とことん生じた「ディスタンス」を遊ぶ、ともすれば皮肉ったような活動が好評を博した。この時の発想は、登園自粛が解けた現在も生きており、なんでも関わる、体験することをよしとしていた過去の実践への挑戦として、専門家の活動をただ「見る保育」が試みられているという。

以上は、同園の取り組みのごく一部である。また実勢には、多分に漏れず深刻な課題も生じている。しかし、新しい遊具が与えられたかのように、物事の間「ディスタンス」をあらゆる方法で味わう姿勢が、コロナを経て保育学がこれまで以上に盛り上がるための鍵の一つになり得ると考える。

●Profile

境 愛一郎（さかい あいichirou）
共立女子大学 児童学科 専任講師
「境の場所」の探求をテーマに、二元論的な観方や既存の領域区分では捉えきれない子どもの生活、実践の実態を描き出すことに取り組んでいる。これまでに、内と外の間にある存在するテラス、家と園とを結ぶ通園バス、保育者とは異なる立場から現場に貢献する栄養士などに焦点をあてた研究を行っている。

コロナ禍での制約から新たな授業を試行して

宮田 まり子

私が勤める大学（保育者養成校）は東京都内にあり、コロナ禍においては2月下旬から生活様式に変化が生じていた。行事や課外活動、授業等の中止や延期、開催方法の変更等、様々な計画が見直しとなった。これらの変更は、学生の葛藤や不安を生み、最初に取り組んだことは学生のケアであった。同時に、コロナ禍においても継続できる学習環境の再構築を教職員一丸となって行った。教員としては、特に学びに向かう意欲が低下しないためのサポートを授業で展開するため、内容の検討を行ってきた。

養成校の講義には、講義、演習、実習科目がある。保育学において、各科目は決して独立したものではなく、双方での学習経験の往来によって成立している。よってまずは全ての科目を対象として、コロナ禍による制約を分析し、見直しの検討を行った。

まず、講義科目の言語的活動に関しては、コロナ禍という環境による制約は少ない。むしろ促進された可能性もある。当然「これまでのように」とはいかないが、様々なメディアを活用して、学習者が知識を取得し、知見やデータ（事例含む）に基づき考察し、さらに他者に説明して共有して対話することは、それぞれのツールの特徴を活かすことができれば、制約が無くなる可能性は高い。

しかし演習や実習において制約は多く、科目のねらいに立ち返り、内容と方法を再構築させる必要がある。よってこれまで幾つかの内容や方法での工夫を試みている。コロナ禍にあっても、学生のモチベーションを高めるための工夫である。

学生には自宅での自粛生活を願っている。その不自由な生活の中で少しでも、主体的に、そして能動的に対象に向かう意識と意欲を持続けるための支援が必要であるように思われた。そこで最初に学生と取り組んだことは、保育を取り巻く近況を正しく知ることであった。大学近郊園の園長先生にお願いし、4月からの保育所の様子についてお話しした

だいた。写真等含む特別講義において、コロナ禍での園での子どもと保護者の実際の様子、保育者の日々の努力を知ることができた。

次に、オンライン授業を園から配信させていただいた^{※1}。その中で、園内をご紹介いただく機会を得た。園長先生とその場にいた保育者による園紹介は、園環境について深く知ることができた。園環境は無機質なものでなく、日々子どもと保育者によって作られていくものであることを再認識することができた。また、学生からはchatを用いて質問を都度受けることができた。質問の中には私が気付かなかった事もあり、私自身改めて園環境を考える機会にもなった。相手を特定してつぶやけるchat機能は、自信の持てない気付きをタイミングも気にせず気楽に伝えられる。通常の園見学では実現できなかった「学生・園・教員」の視点の交流ができたように思う。また、時々子どもたちが園内を案内してくれた。画面に映り込んでいた学生たちの柔らかな笑顔が、非常に印象的であった。保育を学んでいく意欲に確かにつながったように感じられた。園のご協力に心から感謝したい。

依然として課題はある。特に、非言語的コミュニケーションに関する学習は課題である。また、他者の動きから学ぶ機会等、授業内の視覚情報もバランスの悪さを感じている。ソーシャルディスタンスの取得が期待できる地域との連携も検討していきたい。卒後を含む長期的見通しの中で、学習者と共に、新たな学習環境の構築にこれからも取り組んでいきたい。

※1. 園関係者の許可を得ている。また園を訪問する私は健康観察と同時に内科医の診察と指導を得、屋外からの配信を多くするよう努める等して実施している。

●Profile

宮田 まり子（みやた まりこ）

白梅学園大学 子ども学部／白梅学園大学大学院 子ども学研究科
大学では保育者論や保育内容環境、保育所実習、保育実践演習研究等を担当。
保育実践を対象として研究を行っている。研究テーマとして、子どもの相互
行為、保育者の専門性、園内外・屋内外の保育環境について関心を持っている。

◆『保育学研究』の投稿が、電子投稿のみとなります◆

2022年度『保育学研究』第60巻の投稿（投稿期間2021年5月1日～5月20日および2021年11月1日～11月20日）より、電子投稿のみの受付となります。また、応募資格、投稿可能な論文数にも変更があります。詳しくは、2020年度『保育学研究』第58巻第1号および学会ホームページに掲載している応募要項をご覧ください。

その他、「執筆要項」「論文執筆のための手引き書」「電子投稿マニュアル（執筆者用）」なども学会ホームページに掲載してありますので、ご確認の上、ご投稿ください。

リレー討論 「教育・保育の無償化—令和時代の保育学—」Ⅲ

無償化と保育・子育ての危機—子育て支援の観点から—

太田 光洋

皆さんに問いたい。日本の保育や子育ては本当にこのままで良いのか。長時間保育、子育てと仕事に疲弊する生活。子どもにとって、保護者にとってどうなのだろうか、と。

保育・幼児教育の無償化は、ほとんどの保護者から歓迎されている。子育てに要するコストが軽減され、すべての子どもが保育・幼児教育を受けるしくみができたことは歓迎すべきことである。しかし、この無償化は子どもの育ちや子育てをより良い方向に導くのだろうか。本稿では、筆者が長年関心をもってかかわってきた子どもの最善の利益を最優先する子育て支援という観点から保育・子育ての現状とあわせて考えてみたい。

社会で子育て・子育てを支える「子育て環境の支援」としての無償化

無償化は有力な「子育て環境の支援」として機能するという点で画期的といえる。かつて、脆弱だった子育てに直接関わっていない人びとの子育てに対する理解や支援は広がってきている。今回の無償化は税金によって、言い換えれば子育てが社会全体によって支えられるようになったという点で大きな進歩であり、評価できる。

無償化にともなう懸念と危機

しかし、これだけでは十分ではない。前号で黒田氏が指摘しているように、これは所詮「お金の問題」である。保育が極めて社会的な営みであることを考えれば子育て環境について考えるとき、もっと別の観点からの大胆で構造的な改革がなければ、子育てや保育をダメにしてしまうのではないかという危機を抱くのは筆者だけではないだろう。子育て環境という観点から考えれば、非正規労働者を減らし生活に安心と見通しが持てるようにすること、都市部への一極集中の解消などによる労働生産性の向上、通勤・勤務時間の短縮などの実質化、男性・女性の育児休業取得の義務化、保育時間の短縮など。さらに、誤解を恐れずにいえば0歳児保育、病児保育などのあり方や廃止など、さまざまな意見があるだろうが検討されて良いと思う。

「タダで預けられる」だけでは、むしろ、子育ての主体として親が育ち、子どもとともにある生活をあたりまえに過ごす幸福とはかけ離れていくのではないか。もっとも懸念されることは無償化によって「ごく初期から子どもを預けることがあたりまえ」「できるだけ長期間、長時間預けるのが当然」といったムー

ドが蔓延し、「園はそれを預かるのがあたりまえ」「それこそ園の保育サービス」と考える保護者などが増えることである。

このことは2つの点で大きな危機をはらんでいる。1つは、保育現場の多忙化等による「子育て」と「保育」の危機であり、今ひとつは、子育てを人まかせにすることによる「親育ち」や「親子関係」の危機である。

より良い育ちを支える「子育て」「保育」の危機

無償化は、保育・幼児教育の利用を積極的に促す方向に作用する。このリレー討論Ⅰで中坪氏が「無償化がもたらす〈拡張〉」と指摘するとおりである。子育て支援の目的は、子どもにとっての最善の利益を実現することである。保育はそれ自体が子どものより良い育ちを支える支援として機能している。様々な家庭や生活背景を持った子どもたちが保育・幼児教育の場でその時期にふさわしい子どもらしい生活が豊かに保障される必要がある。こうした観点から、保育の質が問われ、その議論が盛んに行われている。しかし、保育現場は多忙化し、疲弊している。事実、無償化により保育需要が増し、さらなる保育者不足によって、待機児の増加、地域によっては保育士の有資格者を保育所に充てるため、地域の支援の場に保育士資格を有する支援担当保育士がいないといったケースも生じている。

こうした状況下で、保育の質向上の推進力になっているのは、個々の保育者の熱意や使命感に支えられた園の自助努力である。結果、保育の質向上に努力する園と、日々の保育のやりくりで精一杯という園に2極化しているのが実情ではないか。また、地域で子育てをする親子支援のあり方やそこでの支援者としての保育者の専門性も危機に瀕しているといえないだろうか。

親育ち・親子関係を支える「とも育て」をめざして

無償化は、子育ての社会化や、共働きの一般化を後押しするものといえるが、あらためて「子育ての外注化」が懸念される。「とにかく保護者が園まかせ、園頼み」「保育者とほとんど話すこともない保護者」「おむつ外しは園まかせがあたりまえ」といった話もよく耳にする。園でも保護者の要望をニーズとしてそのまま引き受けてしまう。幼児期の子どもはその後の時期に比べて、親やその生活の影響を強く受けることが知られている。その意味でも、子育て初期における「親育ちの支援」や「親子関係の支援」は

重要である。

「親が子育ての第一義的責任を負う」ことが強調され過ぎることを警戒しながら、保護者といっしょに子どもを育てながら、子どもの育ちを喜び合い、親としての育ちを支える「とも育て」をめざしたい。「保護者のための支援」と「子どものための支援」の相克は大きな論点のひとつであった。保護者に対する支援は子どものためになっているか。無償化が安易な「人まかせの子育て」になってしまわないように、今あらためてその関係のあり方を見直す必要があると考える。

保育に携わるものとしてできることはなんだろうか

保育に携わるものとして、子育てや保育の望ましいあり方を声にすることが求められる。研究者には、長時間保育や親子関係、親子での生活時間、子ども

の集団規模、保育者数など子どもの生活環境や保育環境等による子どもの育ちへの影響などについて現状を改善する調査研究などが求められるのではない。こうしたテーマは、保育の拡張期に活発に行われたが、その後の社会背景の変化を鑑みれば、古くて新しい課題と言えるのではないだろうか。こうしたことを土台として子どもが育つのにふさわしい環境づくりと保育、子育てを実現していくことができるのではないだろうか。

●Profile

太田 光洋（おおた みつひろ）

長野県立大学 教授

日本保育文化学会会長、長野県幼児教育支援センター長

保育現場で子どもの実際に触れ、保育・子育ての実践研究、保育者養成に力を入れている。また、東日本大震災と保育について継続研究中。

新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

『スポーツで生き生き子育て&親育ち』

藤後悦子、井梅由美子、大橋恵 編著

2019年12月 福村出版

スポーツの素晴らしさは誰もが知るところである。残念ながら、ここ最近では極端な勝利至上主義のもと、行き過ぎた指導やハラスメント問題など、スポーツに関する不祥事が立て続けに話題となってしまったが、それでも「スポーツを通して大切なことを学んだ」「かけがえのない思い出がある」という人は多い。近年では、生涯を通じて身近にスポーツを楽しむという「生涯スポーツ」という語もよく耳にするようになった。

また、子どもの習い事が多彩になり、幼いうちから多種多様なスポーツに触れる機会も多くなった。スポーツに特化した幼児教育を展開している施設も増えているという。

本書は、スポーツ分野においてこれまであまり扱われてこなかった「親」や「子育て」に焦点を当て、保育学、発達心理学、スポーツ心理学、社会心理学、臨床心理学、健康教育、体育など多角的な視点から論じており、「子育て本」としても実に興味深い書である。

柳瀬 洋美（東京家政学院大学）

『発達ロボティクスハンドブック：ロボットで探る認知発達の仕組み』

カンジェロシ, A・シュレシンジャー, M. 著、岡田浩之ほか訳

2019年1月 福村出版

発達ロボティクスとは、「人工生命体（ロボット）の行動能力、認知能力の自律的設計をするための学際的な手法」であり、環境や社会との相互作用を通じて自律的に思考や学習を行い、発達できるロボットの開発を目指している。そこにおける特徴のひとつとして、子どもの認知や行動をはじめとする心身の発達メカニズムの知見を利用していることが挙げられる。本書では詳細な知覚運動、共同注意や心の理論等の社会的認知、内発的動機づけ等の情意面をはじめ、ロボットにそれらを実現させようとする実験的な検討が紹介されているが、それらに先立ち関連する発達心理学、認知心理学の知見が概観され、さらにはピアジェやヴィゴツキーに代表される発達理論が発達ロボティクスの理論的基盤に援用されていることもわかる。本書は最先端の工学的研究を通じて、改めて子どもの発達の特性を見つめ直し、保育に対する新しい理解にもつながる視座を与えてくれる。

田爪 宏二（京都教育大学）

海外レポート

コロナ禍に向かい合うイタリアの絵本

藤田 寿伸（東京学芸大学大学院連合学校 教育学研究科 博士課程）

2019年に始まった新型コロナウイルスの拡散は2020年に入り全世界を席卷し多くの犠牲者が発生、いまなお収束の見通しが立っていない。一方ヨーロッパでのパンデミックが始まると同時にイタリアでは子どもたちを新型コロナウイルスから守るための動きがあった。

イタリアは1月下旬最初の感染者確認からわずか一ヶ月強、3月にヨーロッパ最大の感染者数を記録する事態となった。筆者はイタリア在住経験があり、現在は大学院研究のためイタリアの幼児教育関係者と連絡を取りレージョ・エミリアを含むイタリアの様々な幼児教育活動について常々情報収集をおこなっていたところ、ミラノにある子どもミュージアムMUBAから、3月12日付けニュースレターで子どものためのコロナウイルスを知る絵本の公開が伝えられた。

『好奇心をもった男の子と女の子のための銀河コロナウイルスガイド』というタイトルの絵本（pdf）は

ミラノ、ジェノバ、ヴェローナ、ローマの子どもミュージアムが連携して制作され、全世界で猛威を振るうウイルスに対して、いたずらに恐れるのではなく正しい好奇心をもって情報を知り、適切な予防に勤めることが趣旨となっている。

内容に興味を持ってすぐ日本語に訳したものをミラノの関係者へ送ったところ、訳文を元に正式な日本語版データが公開された。現在は30カ国語に翻訳された絵本のデータがインターネットからフリーダウンロードできる。

<https://www.cmverona.it/en/guida-galattica-coronavirus/>

日本語版（横浜国立大学HP）

<https://www.ynu.ac.jp/hus/edu/23869/detail.html>

コロナ問題に向かい合う教育関係者として国を越えた共感の気持ちを新たに、私たちにも子どもたちの安全な育ちに対して出来ることがまだあるように思う。

新型コロナウイルス感染症による、ブラジルのカノア保育園オンライン授業の現状

鈴木 真由美（NPO法人光の子どもたちの会 代表）

ブラジルは、2020年9月30日現在、新型コロナウイルス感染症による感染者数、世界第3位となっており、死者数では、アメリカに次ぐ、第2位となっている。当初ブラジルは、新型コロナウイルス感染症に対して、対策を十分にとっておらず、都市の、主に貧困地域において、感染者が増加していった。私たちが運営している「カノア保育園」は、ブラジルの北東部に位置するセアラ州アラカチ市というところにあり、外国からの観光客が多い場所であることが災いし、急激な感染者拡大につながった。

ブラジルでは各州知事の権限が大きく、セアラ州知事は、3月16日付で、州都であるフォルタレーザ市のロックダウンを指示した。それに倣うように、アラカチ市でも保育園や学校を含む公共施設が閉鎖された。そして、3月19日付で、アラカチ市のロックダウンが開始された。当初、2週間程度であったロックダウンも世界の状況悪化に伴い、継続されることとなった。

ブラジルは2期制であり、後期である8月から授業を再開することが決定されたが、それは、オンラインによるものと限定された。ブラジルでは2016年より4歳児以降が義務教育とされたため、4歳児クラス以上は、オンライン授業が必須となった。しかし、幼児教育の現場では、子どもに対してオンラインで授業をすることは難しく、また、担任が動画を作成し、それを見ながら、課題を各家庭で実施する方法はその課題設定に困難を極めた。幼児教育において、小学校のような授業設定を想定しているブラジルは、今、その岐路に立たされている。幼児期の教育とはいったい何なのだろうか？ ブラジルではコロナ禍において、それを考える機会を、与えられたようだ。

第74回大会を開催するにあたって

大会実行委員長 小林 真

日本保育学会第74回大会を、2021年5月15日（土）・16日（日）の2日間にわたって富山で開催いたします。大会テーマは『つながる、広がる、深まる』です。実行委員会一同、張り切って準備を進めて参りましたが、新型コロナウイルスの感染拡大を避けるために、第74回大会はオンラインで開催をすることを決定いたしました。

大会の主な行事（開会行事・記念講演・大会企画シンポジウム等）は、当日に富山からライブ配信を行う予定です。それ以外の研究発表・自主シンポジウムは、予め資料や動画を専用のサーバーにアップロードしていただき、参加者は各自で閲覧していただくことになります。また、公開保育は実施できませんが、富山県内の保育関係諸団体に依頼し、保育の研究や実践を紹介する資料を作成していただく予定です。第72回大会のようにポスター発表形式で公開する方向で準備中です。

大会記念講演として京都大学大学院准教授の森口佑介先生に「保育と実行機能」というテーマでご講演いただきます。また第73回大会で実施できなかった国際交流シンポジウムも、オンライン開催の方向で調整中です。その他、大会企画シンポジウムや「子どもとのコミュニケーション」をテーマにワークショップを計画しておりますが、オンライン化に向

けて準備中です。各種の行事が準備中のため、現時点では詳しく紹介できませんが、随時大会ホームページで情報を提供させていただきます。

さて大会テーマである『つながる、広がる、深まる』を設定した理由は大きく2つあります。まず、幼稚園教育要領等の改訂（定）により、小学校とのスムーズな接続がこれまで以上に重要視されています。また今日では、保育の対象となる子どもたちとその保護者が多様化しています。こうした現状を打破して行くには、幼稚園・保育所・認定子ども園が単独で努力をするだけでなく、様々な関係機関と連携することが必要です。

連携を「つながる」という言葉で表現しました。そして多機関（他職種）が連携することにより、子ども・保護者・地域社会を広い視野でみることができます。それが「広がる」です。つながり、広がることによって、保育の内容・方法についての認識が「深まる」と考えられます。つまり、保育現場が抱えている今日的な課題をみんなで解決していこうという思いを込めて『つながる、広がる、深まる』というテーマを設定しました。

多くの研究発表によって大会テーマが実現できることを期待しております。どうかふるってご参加ください。

◆主要国際保育系学会への若手派遣について◆

日本の保育学研究の進展のため、海外の保育学系の学会等で研究発表をする若手会員の支援をしています。

募集期間：1期：2月～5月、2期：6月～9月、3期：10月～翌年1月

金 額：1名につき、上限額10万円

条 件：筆頭発表者として研究発表を行う

申請希望者は、学会ホームページ「会員の皆様へ」→「各種委員会関係」→「国際交流委員会」→「国際交流若手派遣について」をご覧ください。

■ 第74回大会開催案内 ■

2021年5月15日(土)・16日(日)

富山国際会議場・富山大学五福キャンパス(中部ブロック)

大会テーマ：つながる、広がる、深まる

第74回大会はオンラインでの開催となります

◆発表論文原稿の登録について

発表論文集原稿の提出に際しては、特に以下の点を十分に確認してください。

- ☐ 発表する研究の内容は、大会発表時(2021年5月)まで公表されていないものであること。
- ☐ 発表者は、連名者を含め申込時と同じであり、全員が2020年9月30日までに2020年度の学会年会費を納入済であること。かつ、2021年1月12日までに大会参加費等を納入済であること。
- ☐ 一般社団法人日本保育学会大会研究発表に関する規定および倫理綱領を順守していること。

次の場合は、発表論文集原稿を受取することができませんので、十分注意してください。

- ☐ 原稿登録期限(2021年1月12日)に遅れた場合
- ☐ 原稿作成要領の規定に沿っていない場合

* 原稿登録期限の直前はアクセスが集中し、表示に時間がかかるなど、アクセスしにくい状況になることが予想されます。原稿登録は余裕をもって行ってください。システムエラーとなった場合でも、期限後の提出は認められません。

* 発表論文集原稿の書式、作成方法等の詳細は、大会ホームページに掲載の第2号通信をご覧ください。

◆オンライン開催の方法について

自主シンポジウムや口頭発表は大会開催期間の前に、動画を作成し、オンライン上で大会参加者に公開していただきます。ポスター発表も事前にポスターを作成、公開いただきます。また、各発表者には、大会当日にオンライン上で質疑応答を行っていただきます。これらをもって、学会報告をしたものとみなします。

詳しくは、大会ホームページ及び第3号通信(2021年3月上旬予定)をご覧ください。

第74回大会ホームページ：<http://hoiku74.jp/>

◆学生会員の登録(年会費の学生割引)申請について◆

学生会員の登録は、年度毎の申請が必要です。2021年度学生会員の登録を希望される方は、以下の書類を事務局まで郵送してください。

- 学生会員登録申請書(ホームページよりダウンロード)
- 学生証のコピー(有効期限が明記されているもの)または、在学証明書原本(2021年4月1日以降発行のもの)

受付期間 2021年3月20日～2021年4月10日(消印有効)

※申請が受理された方は、年会費が学生会員価格(6,000円)となります。
期日を過ぎた日は、一般会員での登録となります。

◆会員管理システムが変更となります◆

2021年4月1日以降に、新しい会員管理システムにログインし、ご登録情報の確認をお願いいたします。現在登録されている専門領域等は新しい区分に変更となるため、再登録が必要です。

なお、現在の会員管理システムにて、2020年10月16日以降に行った登録情報の変更は、新しい会員管理システムには反映されておりません。併せてご変更をお願いいたします。

第4回（2020年度）日本保育学会 中部地区研究集会

日 時：2021年3月14日（日）13時～15時
会 場：双方向ライブ形式オンライン（300名まで）
テーマ：不思議や謎に挑戦する子どもたち

—これからの保育ができること—

趣 旨：子どもたちが不思議なことや謎めいたことに出会い、好奇心や探究心、想像力を働かせていくような姿を見つめ直すことによって、遊びの世界を広げ、保育の質を向上させるために何ができるか、一緒に考えます。

話題提供：

「謎めいた神秘的な存在との出会い体験が子どもにもたらすもの」 富田昌平（三重大学）

「子どもにとっての空想と現実」

利根川彰博（秋草学園短期大学）

申込期間：2021年1月20日～2月28日（非会員の参加可）

申込方法：申込は以下のQRコード、URLのフォームからお申込みください。

※定員に達し次第締め切らせて

いただきます

参加費：無料

問い合わせ先：上田敏文（名古屋市立大学）

ueda@hum.nagoya-cu.ac.jp



第1回（2020年度）保育政策検討委員会 第1回公開シンポジウム

日 時：2021年3月14日（日）15時半～18時
会 場：双方向ライブ形式オンライン（300名まで）
テーマ：保育・幼児教育の質の向上のための政策

—国の報告と自治体の先進事例から学ぶ—

趣 旨：厚生労働省、文部科学省から出された質の確保・向上の中間報告書と自治体の質向上政策を話題提供いただき、保育政策とその研究の課題と展望を会員の皆様と考えます。

話題提供：第1部 国の報告を読み解く

汐見稔幸、無藤 隆

第2部 自治体の先進事例から学ぶ

草加市および奈良市の取り組み

（詳細はチラシや学会HPをご覧ください）

申込期間：会 員 2021年1月10日～2月10日

非会員 2021年2月11日～2月28日

申込方法：申込は以下のQRコード、URLのフォームからお申込みください。

※定員に達し次第締め切らせて

いただきます

参加費：無料

問い合わせ先：秋田喜代美（東京大学）

kakita@p.u-tokyo.ac.jp



会報第180号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

①海外レポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

②新刊図書の紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストをご紹介します。文献は、著書、論文など15冊（編）以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている（関心をもっている）分野についても、お書きください。

【字 数】 ①800字以内（写真1葉は200字に換算）

②400字以内

③800字以内

【締め切り】 2021年1月30日必着

【送付先】 Mail：hoiku@main.so-net.jp

作成いただくデータはWord（windows）ファイルをお願いします。ファイル名にご自身の氏名を記載してください。

メールには、氏名、会員IDを明記してください。

編集後記

本179号より新しく広報委員会委員長となりました上田敏文（名古屋市立大学 大学院人間文化研究科）です。本号より、広報委員会のメンバーが一部入れ替わりまして、新しい編集委員体制となりました。

新型コロナウイルスの影響は、各方面に及び、いまだ制限された社会活動を余儀なくされています。このような状況下の中で、本号でお届けしたとおり次年度の第74回大会もオンラインでの開催となりました。感染拡大に伴い急遽、参集しなかった73回大会とは異なり、事前に予測されている中での準備ではありますが、従来とは大幅に異なるため、大会委員長を始め運営スタッフのみなさまのご苦勞に感謝申し上げます。

広報委員会も、日本保育学会の新しい取り組みや従来とは異なる情報等について、いち早く、会員のみなさまにお届けできるよう尽力して参ります。